

新美南吉「ごんごろ鐘」論

—庶民的感情の発見—

林家靖*

(平成24年6月19日受付, 平成24年12月6日受理)

A Study of “Gongoro Bell” by Nankichi Niimi : The Discovery of the Common people’s Sentiment

LIN Chia-Ching *

During the time when Nankichi Niimi was entering to his twilight years, his mind was riddled with the conflict of sense and sensibility and the difference between ideal and reality. Such inner entanglement is evidently revealed in the work of “Gongoro Bell”. Hence, when it comes to study late work of Nankichi Niimi, the “Gongoro Bell” should not be overlooked. To be specific, the main feature of this work is the transition from “Self-consciousness” to “common people’s sentiment”, and from “national sentiment” to “common people’s sentiment”. Therefore, the uncovering of the common people’s sentiment can be viewed as the main theme of this work, which also reflects his emotional transitions during that time.

Key Words: Self-consciousness, common people’s sentiment, national sentiment

はじめに

新美南吉の「ごんごろ鐘」は、『おぢいさんのランプ』(有光社, 1942年10月)に所収された。『校定新美南吉全集』第2巻(大日本図書)の解題によると、「現存する自筆原稿の末尾に「一七・三・二六」と制作日付があることがわかる。戦後に出版された作品集(『ごんぎつね』筑摩書房・1951年9月)に「ごんごろ鐘」が収められた際、巽(巽聖歌のことを指す)の加筆があった。この加筆は牧書店版全集に収録する際にも原文に戻されなかったため、作品評価に議論を生じる原因となった。戦争に関する用語や関連する描写が削除、改作されていたわけで、1970年代に南吉の戦争観に物議を醸した^(注1)。

『校定新美南吉全集』全12巻(大日本図書株式会社, 1980年6月-1981年5月, 別巻全2巻は1983年9月)が刊行されるに及んで、南吉作品の全貌が明らかになった。それ以来、服部裕子は「ごんごろ鐘」における二つの鐘のイメージ、つまり村の人々の心とつながっている善意の象徴としての鐘と、国のために爆弾になる鐘という二つのイメージは、読者に混乱をまねき2面の解釈を成り立たせ^(注2)と指摘し、作品における曖昧性をふまえ、テーマ探ることの重要性を強調した。西村英津子は、「作者は、「鐘」という前近代の〈村〉の共同性の象徴を見つめ、尊さを強調している」と述べる一方で、「共同性への

哀惜と「古いもの」=〈前近代〉への侮蔑という〈矛盾〉は、〈戦争〉を契機とした〈国家〉への参与/帰属によって止揚された^(注3)と述べた。「ごんごろ鐘」に言及する論文は、戦争と関わって論じる一方で、作品における両面性に注目してきた。

「ごんごろ鐘」が書かれた際には、鐘を供出することが推奨されていた時期であり、国家主義を提唱されていた時代でもある。戦争が拡大し、政治・経済はもちろん、文化にいたるすべての国民生活が、「お国のために」「戦争のために」規制されていた。そういう厳しい戦時体制下に書かれた「ごんごろ鐘」が、南吉の戦争観と関わって論じられるのはむしろ本作の宿命だと言わざるをえない。しかし、「ごんごろ鐘」の創作背景をふまえて考えてみれば、色濃い戦争の影響の向こう側にある、本作に内包された南吉の思想変容にも言及する必要がある。

昭和16年12月8日に太平洋戦争が勃発し、国全体の国民的な感情を高めていく中で、新美南吉は血尿を出し、それが腎臓結核だと分かったとき、死を覚悟した。年明けの昭和17年1月13日の日記の最後に「破滅が遂に来た」「童話が書きたいのにまとめられない」と書き、日記も創作も一時的に中断を余儀なくされるようになる。日記中断の3ヶ月間を後期から晩年への転換期だとすれば、転換期以前の後期の自伝的少年小説には自意識の強い少年が

* 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生 (Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

主人公として登場することが多い。それに対して、晩年の17年5月に書かれた民話風童話には、善意を持つ素朴な庶民を登場させることが多い。そこには、新美南吉の日本庶民的感情を受け入れていく姿勢がうかがえる。

「ごんごろ鐘」は戦争と関わって論じられることが多いが、本稿では「ごんごろ鐘」における南吉の共同体意識について論じていく。それに、「ごんごろ鐘」の前後の作品や南吉の創作背景・作品世界をふまえ、本作品に見られる南吉の後期から晩年にかけての精神思想的変容を探っていく。本研究は、戦時下の約束事を前提にした上で、南吉が書きたかったものは何かを追究することを目的とする。

1 「ごんごろ鐘」の作品世界

「ごんごろ鐘」は、「三月八日」、「三月二二日」、「三月二三日」の出来事を「僕」が書いた日記という形式で書かれている。

「三月八日」にはごんごろ鐘の名前の由来について、木之助爺さんはごんごろ鐘を作った鐘師がひどい喘息持ちで、その発作が鐘にもうつって、この鐘をたたくと「ごおんのあとにごろごろという」音がかすかに続くためにごんごろ鐘と呼ぶようになったのだと話した。「僕」は木之助爺さんの説を疑い、「ろんよりしようこ」だと思いつつ、自分で証拠を探しに行った。そして、木之助爺さんの説をあまり信頼できないと判断した。

一方、物事に着目する「僕の兄さん」は次のように言っていた。

それはきつと、ごんごん鳴るので、はじめに誰かがごんごん鐘といったのさ。ごんごん鐘ごんごん鐘といってるうちに、誰かが言ひちがへてごんごろ鐘といっちゃったんだ。するとごんごろ鐘の方がごんごん鐘よりごろがよいので、とうとうごんごろ鐘になったのさ。(『校定新美南吉全集 第2巻』大日本図書株式会社、87頁、傍点新美南吉)

「ごんごろ鐘」の名前の由来について、「僕」はかなり理性的な態度で老人たちと兄の話进行分析した。そして、「大学にいつてる僕の兄さんの話が、いちばん信じられる」と「僕」は思った。本作に登場する兄と老人たちは対比的に描かれる。都会の大学にいる兄は、〈理性的で、物事に着目する近代的思考〉の持ち主であり、村にいる老人たちは、〈感情的で、迷信や俗信を信じる前近代的思考〉の持ち主である。「僕」は、村にいる老人たちの説に疑いを抱き、兄の話に信頼するのである。ここでは、「僕」は〈感情的で、迷信や俗信を信じる前近代的思考〉より、むしろ〈理性的で、物事に着目する近代的思考〉に価値を置き、兄の考えと一致していることが読み取れ

る。

一方、ごんごろ鐘を献納することについて、「僕」と庵主さんの思いは対比的に描かれている。「僕」は「僕たちの学校の門や鉄柵も、もうとつくに献納したのだから、ごんごろ鐘だって、お国のために献納したついでいい」と思う。それに対して、庵主さんは「村の御先祖たちの信仰のこもったものだからとか、ご本山のお許しがなければとかいって、ぐづついてるたけれど、けつきよく気まへよく献納することになった」と語られている。

「僕」は「国民六年にもうぢき」になると設定されている。国民学校とは、日中戦争後の社会情勢によって日本に設けられ、太平洋戦争への総力戦体制に対応して言行一致、心身一体の皇国民錬成の教育を目指した学校といわれている。そういう背景があるために、「僕」が、たとえば「小さかった時からあの鐘に朝晩したしんで来たことを思えば、ちよつとさびしい気」のすることがあったとしても、学校で教わることを素直に受取っている。それは、近代国家に属する〈国民〉の意識が教育によって強く作用した結果である。

もちろん、庵主さんや村の老人たちも、戦時下のイデオロギーの影響を受け、皇国臣民としての〈国民的感情〉はあったはずである。だが、彼らは人の感情や共同信仰から出発した伝統的な村落共同体に育てられてきた長い年月の生活をもつために、「御先祖たちの信仰」というような感情が〈国民的感情〉より強く働いている。

ところで、「僕」の「ごんごろ鐘についてのおもひで」も見逃すことはできない。「僕たち村のものにとつては、いつまでも忘れられない鐘だ。なぜなら、尼寺の庭の鐘楼の下は、村のこどものたまりばだからだ」「僕たちの杉の実でつぼうや、草の実でつぼうのたまをどれだけうけて、そのたびにかすかな澄んだ音で僕達の耳をたのしませてくれたか知れない」と語られているように、このごんごろ鐘は村の子ども達にとっては、友達のような存在であった。それは村の老人たちの「御先祖たちの信仰」のこもった鐘に対する感情と相通じるものだが、大人と子どもとでは、〈国民的感情〉の信じ方の度合いが違ってくる。

明治以降の近代化により、意識または精神を律する理性の絶対的優位という近代合理主義・理知主義が流行り、人間の共同信仰から出発した宗教的な庶民的感情は《非合理的なもの》として排除されるようになった。そういう考えを、教育を通して素直に受け入れるのが子どもたちである。

「三月二二日」のごんごろ鐘が出征する場面は次のように語られている。

尼寺へ来て見て、僕はびつくりした。まるでお祭りのときのやうな人出である。いや、お祭りのとき以上かも

知れない。お祭には若い者や子供はたくさん出て来るが、こんなに老人までがおほぜい出て来はしないのだ。

(中略) かういふ人たちも、みなごんごろ鐘と、目に見えない糸で結ばれてゐるのだ。僕はいまさら、この大きくもない鐘が、じつにたくさんの人の生活につながつてゐることに驚かされた。(『校定新美南吉全集 第2巻』大日本図書株式会社、88-89頁、傍線引用者)

こうして「僕」は老人たちのごんごろ鐘に対する深い愛着に気づく。さらに、ある村人が鐘をついた際、「西の谷も東の谷も、北の谷も南の谷も鳴るぞや。ほれ、あそこの村も、鳴るぞや。」と奇妙なことを言う。「僕」は、お父さんの説明によって、ごんごろ鐘が「西や東や南や北の谷の住んでゐる人たちやら、もつと遠くのあつちこつちの村まで合力して」作られたものであることを知る。さらにその言葉にこめられている相互扶助の精神や隣人愛というような感情、つまり伝統的な共同体に由来する日本の〈庶民的感情〉を発見した。

だが、次の場面で村人たちは「ごんごろ鐘」からいくつ爆弾ができるかについて話し合っている。村の人たちは「三つ」の爆弾ができるとか、「いいや、十はできる」と言い合っていることに対して、「僕」は「きいてゐてをかしくなつた。爆弾にも五十キロのもあれば五百キロのもあるといふやうに、いろいろあることを、この人たちは知らないらしい」と思う。ここでの「僕」は周りの村人を無智な人間として、子どもながらあきれているようにみえる。つまり、村人との隔たりがまだ存在していたのである。

「三月二三日」の場面では、ごんごろ鐘にお別れが出来なかつた深谷の老人の残念な様子を見た「僕」は「同情せずにはゐられな」くなり、村の子ども達と一緒に老人を町まで連れて行ってごんごろ鐘を見せることになる。そのときの心情は次のように語られる。「お爺さんを届けにいつてくるのは楽な仕事ではなかつた。が、感心なことに誰もいやな顔をしなかつた。僕らはびつこをひきひき深谷までゆき、お爺さんをかへして来た」。ここでは、「僕」がこの日の経験を通じ、昔に村の人々が「合力」してごんごろ鐘をつくつた苦勞や嬉しさを理解できるようになったことを暗示している。その夜の食事の場面で、「僕」は「それでは、あのお爺さんもまたごんごろ鐘と深いつながりがあつたわけだ」といい、村人の言葉をまた思い出す。それは、この二三日の出来事を通じて、お父さんが説明してくれた「四方の谷の人や向かふの村々の人の心もこもつてゐるわけだ。だから、ごんごろ鐘をつくつと、その谷や村の音もまじつてゐるやうに聞こえるのだよ」という言葉の意味を「僕」が理解したことを意味している。

以上、考察したように、「僕」の村の老人に対する思い

が変わっていったことを明らかにした。「三月二三日」には、村の老人たちのごんごろ鐘に対する感情に気づき、老人たちが持っている相互扶助の精神を認識した。「三月二三日」には、村の子どもたちと合力で深谷の老人を助ける経験を通じ、老人たちの相互扶助の精神を身をもって理解できるようになった。

南吉は「僕」のことをいわゆる〈少国民〉として位置づけ、そこから、「僕」は物事の合理に着目する〈近代的思考〉や皇国臣民としての〈国民的感情〉に価値を置き、理知的な少年に近い存在として登場する。「三月八日」の時点で「僕」は、人の感情や共同信仰から出発した〈前近代的思考〉を否定的に捉えていた。しかし、鐘献納を通して、一部受け入れるようになった。それはつまり、伝統的共同体に由来する日本の〈庶民的感情〉、いわゆる相互扶助という美風を知るようになったということである。ところで、最後のラジオで戦報を聞いていた場面では次のように語られている。

僕の眼には、爆撃機の腹から、ばらばらと落ちてゆく黒い爆弾のすがたがうつつた。

「ごんごろ鐘もあの爆弾になるんだねえ。あの古ぼけた鐘が、むくりむくりとした、ぴかぴかひかつた、新しい爆弾になるんだね。」

と僕がいふと、休暇で帰つて来てゐる兄さんが、

「うん、さうだ。何でもさうだよ。古いものはむくりむくりと新しいものに生まれかはつて、はじめて活動するのだ。」

といった。兄さんはいつもむつかしいことをいふので、たいてい僕にはよくわからないのだが、この言葉は半分ぐらゐはわかるやうな気がした。古いものは新しいものに生まれかはつて、はじめて役立つといふことに違ひない。(『校定新美南吉全集 第2巻』大日本図書株式会社、99頁、傍線引用者)

「古いものはむくりむくりと新しいものに生まれかはつて、はじめて活動する」という考えは、「僕」と兄と一致しているところである。では、「僕」がわかつた「半分」とは、何を意味しているのだろうか。

当時の政府は、「お国のために」「全てを戦争へ」というようなスローガンを掲げ、〈庶民的感情〉を〈国民的感情〉へと巧みに昇華させることをはかつた。〈古いもの＝古ぼけた鐘＝庶民的感情〉・〈新しいもの＝黒い爆弾＝国民的感情〉として考えれば、「庶民的感情が国民的感情に生まれかわつて、はじめて活動する」というのは兄の考えである。〈理性的で、物事に着目する近代的思考〉の持ち主として登場する兄にとっては、〈感情的で、迷信や俗信を信じる前近代的思考〉は非合理的なものとして排除されるべきなのである。「何でもさうだよ」といったように、

兄は古いものを全面的に否定し、古ぼけた鐘や庶民的感情というような古いものは新しいものに生まれかわらなければ、何の意味も持たないというのである。

一方、「僕」は〈古いもの＝古ぼけた鐘＝庶民的感情〉という存在に意味があると認めている。「僕」は鐘献納の出来事を通じて、村人が持っている互いに助け合う〈庶民的感情〉に共感し、それを認めるようになっていたのである。

「僕」も兄も戦時体制下の教育を受けたために、近代国家に属する国民という意識が底流に流れている。しかし、「僕」は相互扶助の精神を発見したために、伝統的な共同体に由来する日本の〈庶民的感情〉の価値を評価するにいたっていた。それゆえに、鐘献納に対する兄と認知が違ってきて、分裂するようになった。「僕」は戦時下のイデオロギーが育んだ〈国民的感情〉によって、お国のために古ぼけたごんごろ鐘は新しい爆弾に生まれかわって、はじめて役立つと認める一方で、老人たちが持っている〈庶民的感情〉も受け入れ、大切にしようとするのである。

戦時下においては、鐘も、共同信仰としての存在であるより、新しい爆弾になったほうが現実的だと「僕」は思う。ごんごろ鐘が爆弾に新しく生まれかわることではじめて役に立つと結末で明示しているために、「ごんごろ鐘」は戦争に迎合した作品という印象を読み手に与えるが、そうであるにしても、「何でもさうだ」とは「僕」は考えなかった。「半分ぐらゐはわかる」というのは、「僕」が村人を通じて理解した〈庶民的感情〉のよさを差し引いたうえで〈国民的感情〉を認めようとする表現である。新美南吉が「ごんごろ鐘」で表現した最も重要な一節がこの「半分ぐらゐは分かる」である。

2 「ごんごろ鐘」に見られる南吉の共同体意識

明治以降の近代化により、人間関係の基調をなす前近代的な村落共同体は次第に解体を余儀なくされる。昭和15年に戦争体制に入り、すべての政党や労働組合が解散に追い込まれ、全国の市町村に隣組が設けられた。16年4月に教育制度まで変え、天皇と国家へ絶対的忠誠が一番大切とされ、皇国臣民としての生き方が、小さいころから骨の髄までたたきこまれていった。こうして時代は〈前近代的な村落共同体〉から〈戦時下の国家共同体〉へ変貌していく。

「僕」は戦時下のイデオロギーの影響で〈国民的感情〉を持っているが、村でのごんごろ鐘を献納することで日本の〈庶民的感情〉を発見して受容するようになった。ところが、最後にラジオの戦報を聞いた途端に、「僕」の中にある〈国民的感情〉がまた振起されるようになった。この結果、「ごんごろ鐘」に描かれている村は、〈庶民的感情〉を基盤としての〈前近代的な村落共同体〉と〈国民

的感情〉を基盤としての〈戦時下の国家共同体〉という両面の解釈が成立することとなった。

次には、「ごんごろ鐘」に見られる南吉の共同体意識について明らかにしていきたい。

新美南吉は日米開戦後の12月12日に「いよいよはじまったかと思つた。何故か体ががくがく慄へた。ばんざあいと大声で叫びながら駆け出したいやうな衝動も受けた」と日記で述べている。そこには南吉は日米開戦に対する〈国民的感情〉の昂揚感があらわれている。文学者の河内仙介も、「日本学芸新聞」の昭和17年1月15日号に掲載された作品に、12月8日のことを以下のように書いてある。

私はその日のうちに書き上げなければならない、原稿のことも忘れていた。(中略)私は釘付けされたみたいに、ラジオの前に座り込んで飯を食うのも忘れていた。ただ、なぜか、咽喉が頻りに渴いた。

河内の文章をめぐり、岡本卓治は「今日から見て特に際立った文章とは思えないが、かえってそれだけに日米開戦の事態に直面した国民の感情の一面を率直に代表していたと言えるのではないだろうか。言うなればここには、〈非常時〉の出来が日常性を一気に止揚してしまった昂揚の瞬間が語られている」^(註4)「ところが、こうした昂揚には概して持続性が欠けている。この時こう記した河内仙介も一年ほど後には当局に反戦的と見做された作品を書くに至っているそうである。といて当初の感情に激しさがなかったわけではないだろう」^(註5)と述べている。また、太平洋戦争が勃発した当時の文学界の動向について、鷺只雄は「大東亜戦争が勃発するに及んで殆どの文学者が国民として感動し、一致団結するに至った」^(註6)と指摘している。

昭和16年末から17年初にかけては、文学者も含めて国全体では〈国民的感情〉が昂揚し、〈一致団結〉に至った状況にあった。戦時体制の中では、国家がすべての前提となり、村は国家に内包されてしまう。だが、「ごんごろ鐘」では反対に、〈国民的感情〉が薄くなっていき、〈庶民的感情〉が色濃くなっていくために、〈国家共同体〉という人間集団のイメージは時代の背景となり、〈村落共同体〉という村のイメージが前景化されていく。換言すれば、「僕」の目に映じる村というものは〈戦時下の国家共同体〉の要素がだんだん薄くなり、〈前近代的な村落共同体〉の要素が強くなっていくのである。それは南吉の中で、戦時下の国家体制に由来する〈国民的感情〉よりも、前近代の人が互いに助け合う日本の〈庶民的感情〉を大切に扱おうとしたことを物語る。

ところが、南吉は結局、〈国民的感情〉を切り捨てることもできなかった。だからこそ物語の最後でラジオの戦

報の場面を通じ、読み手に戦争の現実を実感させ、それに賛意を示すことになったのである。だが、強調しておく、南吉は全面的に〈国家共同体〉へ向っていく戦時体制下において、従来からの〈村落共同体〉における相互扶助の美風を強調する気持ちの方が強かった。兄の言葉が「半分ぐらゐ」分かれると「僕」が言ったのは、兄のように「何でもさうだ」とは言えない、という強い主張をそこに響かせようとしたのであろう。「僕」は兄の言葉を「半分ぐらゐは分かる」と言ったが、そのとき残りの半分以上は、〈庶民的感情〉に対する共感によって、「僕」の胸は占められていた。

3 「ごんごろ鐘」に見られる南吉の精神変容

南吉昭和10年3月の「メモと日記」に、従姉にあたるおかぎの結婚式に関する記述があった。その中に田舎の人々にはついて次のように書いてある。

私は内心得意であつた。若くてしかも教養をうけたものといつては私一人だからである。私はこの無智な遅い人々の中でやさしさに於て異彩を放つてゐるに違ひあるまい(略)。

おかぎはこの丘のてつぺんの一軒の家に嫁いで来たのだ。(中略)東の方に東京といふ華かな都会のあることも知らないで、文学といふ美しい遊びごとのあるのも知らないで。何といふ寂しいことであらう。(『校定新美南吉全集 第2巻』大日本図書株式会社、18頁)

この日記を書いたとき、南吉は東京外国語学校に在学中である。南吉はたった一人の「教養を受けた」自分が、この「無智な遅い人々」の中で所謂秀才のような存在だと考えているようである。自ら優越感を持ち、自分は田舎の人間と異なっていることを強調するのである。そういう自意識が強くて周りの人と隔たっている少年は、「ごんごろ鐘」以前の生活童話風作品群、いわゆる自伝的少年小説にはよく登場する。南吉は小学校中高学年の子どもを主人公として登場させ、子どもの現実生活や、内面心理を巧みに描いている。それらの作品は南吉の少年期の体験が生かされたものが多いと思われる。たとえば、「久助君の話」(昭和14年)での「四年から五年になるとき、学術優等品行方正の褒美をもらつて来た」久助君や、「山から来る少年」(昭和16年)に登場する、親友に「甲ばかりだらう」といわれた彌平君、「貧乏な少年の話」(昭和16年4月以降と推定)で「僕が優等生だぞ。僕の家は貧乏だつて何にも後ぐらいことはないぞ。」と言い放つ大作君、あるいは「屁」(昭和15年)に登場した「級長であり、「近代・都会・文化」に強い憧憬の念を持つ春吉」^(注7)などが挙げられる。それらの主要な登場人物は、いずれも孤独で、周りの人と距離を取る自意識の強い少

年である。

また、木村功が「新美南吉「屁」論—異化する石太郎—」^(注8)において、「屁」には友愛や平等意識をもった児童は登場しないと述べているように、「ごんごろ鐘」以前の自伝的少年小説作品群には、確かに「同情」や「扶助」、「友愛」などの要素があまり描かれない。しかし、「ごんごろ鐘」に登場する「僕」は、深谷の老人に対しては「深く同情せずにはゐられなかつた」ために、他の子どもたちと「合力」して老人を助けた。そこには、自分から他者に向っていくという南吉の精神的変容が見られる。「ごんごろ鐘」に描かれた「僕」という子ども像は従来の南吉作品に登場する子ども像とは異質である。

それに対して、「ごんごろ鐘」以後の5月に書かれた民話風童話群には、自分の本質や罪を自覚し、周りの人間と融和していく下積みの農商人や人間関係の基調をなす村落共同体で育てられた感性的な庶民が登場する。たとえば「牛をつないだ樁の木」の海蔵さんのように、人々のため井戸を掘ろうとする彼が井戸を掘らせない地主の老人が死ぬのをいったんは待ち望むが、母のおかげで自分の罪悪を自覚し地主に謝る。そこで地主の協力をえて井戸を完成する。また、「花のき村と盗人たち」で登場する盗人のかしらは、草鞋を履いた子供や、仔牛、村役人に信頼されたことで、それまでの人生を反省し、村役人に自分が盗人であることを自白するにいたる。それらの晩年の民話風作品に登場する主人公は、感情が豊かな、偏見や自負を捨てていく庶民として描かれる。

興味深いことに、南吉のその謙虚で偏見や自負を捨て、自分の罪を深く覚える思いは晩年の日記にも書かれている。「昭和17年4月22日」の日記に「ほんたうにものわかたつた人間は、俺は正しいのだぞといふやうな顔をしてはゐないものである。自分は申しわけのない、不正な存在であることを深く意識してゐて、そのためいくぶん悲しげな色がきつと顔にあらはれてゐるものである。」と書いているのである。

新美南吉は死を覚悟した後の「昭和17年1月13日」の日記に「小さな四角な紙の世界。なつかしい文学の世界。そこに遊んでゐるとき僅かに死のことを忘れえた」「死のことを忘れるために小説を読む」と記し、文学に対する愛着を示した。だが翌日の日記には「風景に詩を見られなくなつてしまつた。やはり精神が落ちつかぬのだ。童話が書きたいのにまとまらない」と述べ、死病の記録と陰惨な心境を記す。

しかし、文学活動を再開する初作品となった「ごんごろ鐘」では、村にある庶民的善意性や庶民的感情を発見し、周りの人へ融合して行くテーマが示された。村や庶民に対する思いは日記にもあらわれている。日記再開の昭和17年4月以降、明るく美しい村景スケッチに変わり、4月19日に「百姓達の村には、本当に平和な金色の夕暮を

めぐまれることがある。麦の穂は美しく出そろひ、山羊小屋の窓が隠れるほどである。」と村のことが美しく記されている。死の覚悟が、南吉の目を、かえって自分から周囲の人や自然に移させたのである。その結果、周りの人の善意や村の美しさを作品や日記に書き留めるにいたったと考えられる。

繰り返しになるが、「ごんごろ鐘」に登場する「僕」の兄と村の老人たちは対比的に描かれている。兄さんは〈理性的で、物事に着目する近代的思考〉の持ち主であり、老人たちは〈感情的で、迷信や俗信を信じる前近代的思考〉の持ち主である。主人公の「僕」は兄さんと一致している立場から老人たちに近づいていった。一方、南吉の後期の自伝的少年小説から晩年の民話風作品にかけて、登場人物は〈近代の子ども〉から〈前近代の庶民〉に一転した。そして〈自意識過剰な子ども〉から〈人のために尽くす庶民〉に変容していった。

南吉は前近代的な善意に溢れている平和な村を舞台にして民話風作品群を書いた。それらの作品には、作中や結末部に語り手「私」が登場し、語りの現在に注目させるという特徴が見られる。「和太郎さんと牛」を例に挙げると、「この天から授かった子供の和助君は、それからだんだん大きくなり、小学校では私と同級で、「(和助君は)今ではジャワ島、あるひはセレベス島に働いてゐることと思ひます。」と、語り手は「今」すなわち語りの現在のことを読み手に考えさせる。読み手はこの語り手の介入によって、自分たちの日常世界がどのようなものかもう一度振り返らされるとともに、南吉童話を現実世界と関連づけることになる。「ごんごろ鐘」は、過去の出来事を語る物語ではないため、語り手の現在が前景化するものではないが、結末部のラジオのニュース場面によって、読み手に、戦時下の現在を考えさせる意味では同じ効果を与えている。こうした現実世界を意識させる書き方は南吉文学の特徴といえよう。

おわりに

本稿では、「ごんごろ鐘」の作品世界を検証することによって、「庶民的感情の発見」が本作品の重要なテーマであることを明らかにした。〈庶民的感情〉をキーワードにして二つの結論を導き出した。

まず一つは、ごんごろ鐘を献納することについて、「僕」は近代国家に属する〈国民的感情〉から伝統的な共同体に由来する〈庶民的感情〉へと近寄っていったことである。それによって、本作品における〈村落共同体〉という村のイメージが前景化された。「ごんごろ鐘」の冒頭には、戦時下のイデオロギーに由来する〈国家共同体〉の少年のイメージが示される。だが、庶民的感情や庶民的善意性が強調されていくにつれて、前近代の人間関係の基調をなす〈村落共同体〉のイメージが強くなっていく。

南吉は「17年6月5日」の日記に「小説の人間批評的な性質について。社会批評ではなく。」と述べている。彼は小説の性質について、社会批評よりは人間批評に重点を置いていた。「ごんごろ鐘」も晩年の一連の民話風作品もそういう傾向がみられる。南吉は鐘献納の話を取り上げて作品を書いたが、鐘献納を賛美していたわけではない。鐘を供出することによって庶民的感情を焦点化しようとした。そう考えたとき、一連の民話風作品が世に出た理由も分かってくる。

晩年の民話風作品に描かれる村は、人の感情や共同信仰から出発した伝統的な村落共同体である。それらの作品に見られる平和な村は南吉が憧れている理想的世界である。南吉は、『良寛物語 手毬と鉢の子』(学習社、1941年10月)の執筆及び『都築彌厚伝』を書くための資料調査を通じ、前近代での人間関係の基調をなす〈村落共同体〉のありようを認識し、それを受け入れるようになったと考えられる。彼は作品を通して、人情や義理に溢れた日本の〈庶民的感情〉を読者に気づかせ、その貴重な善意性を取り戻そうとしたのではないだろうか。

もう一つの結論は、「ごんごろ鐘」には近代人の自意識が招きよせる人間の孤独の問題を考えようとするところから離れ、互いに助け合う〈庶民的感情〉を受け入れていく特徴が見られることである。その特徴は南吉の後期から晩年にかけての作品変容や転換期の南吉の精神的変容と密接につながっているために、本作は南吉の後期と晩年作品との関係を考察する際に見逃せない作品だと考えられる。

自意識を持つにいたった人間の孤独とどう向き合うかという問題が、南吉が死を覚悟する前までに考えていた課題だとすれば、〈庶民的感情〉は死を覚悟した南吉が大事に扱おうとした課題である。戦時体制下の〈国家共同体〉が現実世界のものとすれば、善意に溢れた〈村落共同体〉とは南吉の理想世界のものであろう。南吉は戦時下に死病を得て、心身ともに絶望を覚える状況にあった。その状況が、南吉に、他者との繋がりを求めさせるようになった。

当時、彼に用意された外部世界は息苦しい戦時体制であった。そういう現実世界の下で、彼を慰めてくれたのは『古安城聞書』に書かれている庶民的善意に溢れた理想世界であった。都築彌厚が生きていた江戸時代は「火事でやけると組内の人々が米や麦をもってよりあつまつて片づけた。」「まるやけの場合は、めしびつや家材道具をもっていつていった。」という「隣組の美風」が漂っていた。

南吉は非日常的な理想世界を描こうとしたが、結局、日常的な現実世界に戻らざるをえなかった。そこには南吉の中にある矛盾や心の揺らぎが見られる。南吉は「時流に酔えないほどの目覚めた自意識の持ち主」^(註9)だった

ために、現実から逃避することができなかった。

「ごんごろ鐘」は戦争と関わって論じられることが多いが、本研究では違う視点で解釈の可能性を探ろうとした。結論からいえば、南吉の後期から晩年への精神思想的変容は、「ごんごろ鐘」に凝縮されている。その意味で本作品は南吉文学を研究する際に重要な材料だと考えられる。

〔付記〕本文中の新美南吉の作品、日記、文章からの引用はすべて大日本図書版『校定 新美南吉全集 全14集』（1980-1981年）により、旧字体はすべて新字体に改めた。

—注—

- 1 詳細は、都築久義「戦時下の南吉—その戦争観を中心に—」『日本児童文学』19(12), 1973, 佐藤通雅「戦時と新美南吉」(『日本児童文学』17(12), 1971), 細谷建治「新美南吉論—ぼくらがどのように状況にかかわったらよいかを考えるためのひとつの長い問題提起として—」(『日本児童文学』19(3), 1973), 「“ふたたび偽装を問う” —新美南吉にとって戦争とは何であったか—」(『日本児童文学』20(2), 1974), 高森邦明「新美南吉論を深めるために—巽氏の削除を中心として—」(『日本児童文学』20(2), 1974), などを参照。
- 2 服部裕子「戦時体制と新美南吉—言論体制・文化統制の視点から—」『文化科学研究』中京大学文化科学研究所, p.24, 1996
- 3 西村英津子「新美南吉『ごんごろ鐘』論—〈近代〉への融合, そして戦争肯定への道—」『社会文学』31, p.131, 2010
- 4 岡本卓治「文学者と〈大東亜共栄圏〉」『講座昭和文学史 第三卷 抑圧と解放〈戦中から戦後へ〉』有精堂, p.91, 1988
- 5 岡本卓治「文学者と〈大東亜共栄圏〉」『講座昭和文学史 第三卷 抑圧と解放〈戦中から戦後へ〉』有精堂, p.94, 1988
- 6 鷺只雄「芸術的な抵抗」『講座昭和文学史 第三卷 抑圧と解放 〈戦中から戦後へ〉』有精堂, p.34, 1988
- 7 木村功「新美南吉「屁」論—異化する石太郎—」『賢治・南吉・戦争児童文学—教科書教材を読みなおす—』和泉書院, p.121, 2012
- 8 木村功「新美南吉「屁」論—異化する石太郎—」『賢治・南吉・戦争児童文学—教科書教材を読みなおす—』和泉書院, p.107, 2012
- 9 佐藤通雅「戦時と新美南吉」『新美南吉童話論 自己放棄者の到達』アリス館牧新社, p.266, 1980